

1年生が入学後に小学校生活に適応していく過程

古屋 果 歩	埼玉大学教育学部家政教育講座
吉川 はる奈	埼玉大学教育学部家政教育講座
船山 徳子	さいたま市立大宮小学校
今村 信哉	さいたま市立大宮小学校

キーワード：小学校、1年生、適応過程、学校生活

1. 問題と目的

子どもにとって、小学校入学はフォーマルな社会集団への最初の参加である(大獄、1998)。入学したばかりの1年生について、集団行動がとれない、授業中座ってられない、話を聞かないなどの状態が数カ月継続する状態が指摘され、「小1プロブレム」として危惧(文部科学省、2010)されている。関連して幼稚園と小学校の教育方法・カリキュラムの「段差」の指摘(西山、2002)や、家庭の問題、子どもの生活の変化、幼保小の段差の問題、小学校をめぐる問題の4つの側面が報告(丹羽・酒井・藤江、2004)されている。

ところで平成21年度から全面実施された幼稚園教育要領と平成23年度から全面実施された小学校学習指導要領においては、幼稚園と小学校が、幼小連携に関して相互に留意する旨が示されている。平成21年度から適用された保育所保育指針においても、小学校との積極的な連携を図るよう配慮することが示されている(渡辺・伊野、2013)。幼小連携活動は増加し、保育所も加わった幼保小連携の取り組みも展開されている(濱田、2010)。幼小連携に関する研究は数多くおこなわれており、子どもの発達や実態についての調査、連携に関する実践が報告されている。しかし幼児・児童の発達や実態を捉え、子どもの視点から幼小の環境移行やカリキュラムを捉えようとするものは少ない。

学校の移行と適応に関する研究においても、日本では中学生、高校生を対象としたものが多く(盛ら2008)、小学校入学の移行における適応過程の研究は少ない(山本ら 1981)。

さらに、就学前教育の重要性が叫ばれ、様々な地区で小学校教育へのスムーズな接続のために幼稚園や保育園の保育はどうあるべきかの検討が多くなされているが、就学後の対応が検討されることはあまりない(塩澤、2011)。

上野(2005)、吉川ら(2006)は、入学式後からの1学期間、1年生を観察し、小学校生活に適応していくまでの間には、新しい環境の変化による戸惑い・不安・失敗等の多様なつまずきが生じるが、それを乗り越え解消していく姿を報告した。一方、児童が教科書を用いた授業を含む学習活動において、小野瀬(2011)は、理解困難な状況に陥り、先に進めなくなることを「つまずき」と報告している。このように1年生の学校適応の問題には、学習面や生活面とあらわれる場面が1つではない。

本研究では、1年生の授業以外の場面での変化を中心に、小学校生活にどのように適応していくのか、1年生の戸惑いや「つまずき」も含め、明らかにすることを目的とする。入学直後から2学期にかけて継続して観察し、そこでの対応について検討していく。

2. 方法

2-1 調査対象

埼玉県内の公立小学校1年生27名（男子17名、女子10名）

2-2 調査期間

2013年4月～2014年1月 週1回 合計158時間（夏休みを除く）

2-3 調査方法

調査方法として、参与観察法を用いた。学級に入り、児童や教師の様子を観察した。また必要に応じて学習の補助を行った。

2-4 調査内容

1日の中で見られる児童の行動や発言、教師の発言、教師と児童の関わり、児童間の関わり等を観察し、随時メモをとり、フィールドノーツを作成した。定期的にその内容の読み取りについて教師にたずね、不適切さがないかを確認してすすめた。

3. 結果と考察

3-1 エピソード数

総計で287個のエピソードが抽出された。全エピソードの中から、特に変化や特徴の見られたエピソードを抽出し、1年生の学校生活の基本的な習慣である1)登校して、授業開始までの用意、2)学習場面、3)給食、4)掃除に分類しまとめた。紙面の都合上、本論では、表1に示す1)授業開始までの用意、3)給食、4)掃除についてとりあげ、論じる。

3-2 小学校の生活に適応していく過程

(1) 登校後、授業開始までの準備をする行動の変化

入学後1、2週間：入学当初は、教室に入った児童がどのように行動すればよいのかを示すために、名札をつけランドセルをしまう等1つ1つの手順表が掲示されていた。登校後の教室は静かな状態が続いていた。児童の動きはまだぎこちなく、小学校生活への緊張が感じられた。しかし繰り返し実践する中で次第に児童の行動はスムーズになり、5月には手順表がなくても用意ができるようになった。教師からの声かけだけでなく、登校した児童から順に用意をするという準備の流れが、後から登校した児童のモデルとなったと考えられる。また、自分の用意が1人でできるようになったことで、次第に用意をしながら友だちと会話をし、早々に用意をしてあさがおの様子を複数で観察する様子も見られた。複数の児童で元気よく教室に入り、周りの児童が、登校した児童の名前を呼んであいさつする様子もあった。登校後の行動が定着したことで児童の心に余裕が生まれ、他の児童とも少しずつ打ち解けられるようになった。

2学期になると、友だちの用意を手伝おうとする児童の様子も見られた。係活動等や気の合う友だちとの関わりの中で、手伝いをしよう、協力をしようという気持ちが芽生えたのではないかと推察される。

(2) 授業開始前後の様子

入学直後は健康診断などが多く、教室の椅子に45分間座り続ける機会は少なかった。そのため、

表1 1年生が学校生活に慣れていく過程

※Tは1年生学級の担任教師を示す。

観察日	登校時の板書	登校後、授業までの用意をする児童の行動	給食の様子	掃除の様子
4月①	◆「ごようい」の流れを掲示 	・登校した順に、 黒板を見ながら 用意を始める。 ・児童同士の 会話はほとんどなく 、周りの様子を伺いながらゆくり用意をする。	・1時間目に、給食での服装、配膳までの準備の仕方(トイレ・着替え・手洗い)、食事をする班編成を学習する。 (事前学習) ・実際に着替えてみる。	
4月②		・黒板を見ながら、一つひとつ順番に用意を始める。 ・Tの声かけがなくても、自分で黒板を見ながら用意ができるようになる。	12時から給食準備へ (4時間目終了は12:25) 片づけの方法を学習する。	
4月③		・児童同士の会話は少なく、自分の作業に取り組んでいる。	・着替えだけ済ませ、手洗いをしていない。 ・給食を着せられずに観察者に持つてる。 ・水飲み場を遊んでいる。 ・牛乳パックが開けられない児童がいる。 ・ 教室中は会話がほとんどない、静かな状態 ・給食室から帰るときはペアで手をつなぐ。(給食当番)	
4月④		・ 板書を見なくても、用意ができるようになっていく。 ・ 用意がしながら、友だちと話す 児童が出てきた。	・ 着替え、手洗いがスムーズにできる。 給食当番はTの指示をよく聞き、配膳する。 ・食事中はとも静かである。 ・牛乳パックをあけるのに苦戦する児童がいる。 ・周りの様子を伺いながらおかわりに行く。	
5月⑤	◆「ごようい」の具体的な指示なし 	・「 ごようい の指示がなくても、自分で用意することが出来る。」 ・用意が終わった女子児童数人が、朝会があるため教室の後ろに自ら並び始める。 (黒板の指示がなくても自ら行動する)	・4時間目終了後、給食の準備開始 ・班の交代、新しい給食当番へ ・配膳に戸惑い、いつもより食事開始が遅れる。 ・牛乳パックに苦戦している (周りの児童が増える) ・おかわりをする	・6年生が教室にきて、教室そうじ・ろうかそうじの手伝いをする。(黒板、ほうろくはるか) ・ 1列になって目目になって拭く。 (空ぶき) 前の人のとの間隔は3マス分、1マスもあけないように拭く。 ・拭くのが遅い (お尻を上げて拭くのが遅い) 児童 ・ お尻を上げて拭く 児童、 お尻を上げて拭く 児童
5月⑥		・登校した児童から、てきぱちと用意をする。 ・ベランダに出て、あさがおの成長を見たり、児童同士で 楽しそうに会話を 余裕が出ている。	・着替えと準備の時間が早くなる。 ・回目がスムーズになった。 ・班の中での会話が增える。 ・ 協力して片づけ を行う。	・ろうか・はく、水ぶき 5月中は6年生と一緒に行う→今後、水ぶき・黒板掃除を追加 ・ どうきんの取り方が付いた、正しい取り方がわからない。 ・お尻を上げて拭くのが苦手な児童がいる
5月⑦		・近くの児童と会話をしながら用意をする。 教室内はとも静かである。	・班があ、ペアも変わる。配膳が遅れる。 ・ 全部食べ終わると、少しづつ会話が增える。 ・おかわりをする児童が増える。 ・ 配膳が増え、片づけが早くなる。 ・牛乳パックを開けるのに苦戦する児童がいる。	・先週ろうかも掃除児童が、今週ろうかそうじのメンバーに掃除のしかたを教える。 ・ 拭く時の先頭を決める。 ・全員でとりとりをとりに行く。 ・ 掃き残りを動かし する ・正しい掃き方ができない児童がいる
5月⑧		・Tが伝えた 目録時間(28分10分) を学習しながら用意をする。 ・ 係の仕事をするため、友だちに声をかける。	・牛乳、小食年は児童だけで給食室へ取りに行く ・ Tはようきで指示し、あはははに響いて別の作業をする。 ・給食当番、給食当番以外の児童の行動が定着している。(15分程度で配膳完了) ・食べられるように児童が他の児童を応援する。 ・「全部食べられたよ。牛乳パックもあけられた」 ・友だちの片づけを手伝う	
6月⑨		・早々と用意を終える。 ・係活動が定着してきており、用意が終わったばかりの児童は率先して手伝いをする。	・おかわりをする。 ・自分の分を食べる前におかわりをし、Tに注意を受ける。	・ぞうきんしぼりが不十分な児童がいた ・ろうかそうじ先頭をやりが、後方になると動きがおそくなる。 ・途中ではくのをやめ、ちりととりをとりになってしまう。 掃除場所の把握ができていない。
6月⑩	◆「ごようい」「みずやり」の板書が 	・宿題提出の際、「おねがいします」と言ってお出ようになる。 ・用意が終わった児童が遠くの児童と話をする。	・給食当番の児童が、 他の給食当番に「早くしてー！」と呼び続ける。 ・配膳が早い。 ・「全部食べられるようになったよ」	・ろうかそうじ互いに注意しながらはく。一人がちりととりでこみを取る間に、他の児童は雑巾をしぼりに行く。
6月⑪		※観察者は他クラスへ(記録なし)	・ 食べるのが遅い児童に、他の児童が声をかける。 ・給食中の会話(習い事について)	・教室掃除の児童がろうかそうじを気にかける。互いに注意しながらはく、拭く回数を言い合う。
6月⑫	◆板書なし	・ 板書がなくても、いつもおりに用意、水やりをする。 ・席替えをしたが、自分の席にスムーズに座る。 ・Tとのあいさつだけでなく、名前を呼んで児童同士であいさつを交わす様子が見られた。	・Tは盛り付ける量のみを指示。 基本的には児童だけで配膳する。 ・ 片づけが終わらないうちに給食室へ運ぶ。 給食中の会話が增え、楽しそうに食事をする。	・ろうかそうじは早く終わって、教室掃除をするのがえらい!(勝手なルールで掃除を終えてしまう。)
7月⑬		・板書がなくても、いつも通りの用意をする。 ・ 外廊下は荷物が多いため、取っ手がない児童が教室に入る前に廊下に荷物(体操袋など)をかける。 (効率を考えて行動し)	・新しい班での配膳。開始が遅れる。	
7月⑭		・板書がなくても用意をする。あちこちで会話が飛び交っており、朝から教室内は賑やかである。	・新しい班編成だったが、食事開始はいつも通り	
9月⑮	◆「ごようい」「おきかえ」の板書が 	・個別に黒板を見て、行動を始める。 ・名札をつけながら近くの友だちと話す様子が見られる(男子同士) ・早く用意の終わった女子児童が、 他の女子児童の用意を手伝おうとする 場面が見られる。	・ Tが不在の中、児童だけで準備をする。 ・観察者はがやっていると児童に確認しながら行う。 ・まずまずスムーズに配膳し、早く食事を開始した。(12:40)声をかけ、片付けも早かった。	
10月⑯		・登校した児童から、用意をする。 ・遅いなら体育がある日のため、 着替えをしなくてよいのかTに尋ねる。 ・早く用意ができた児童は、リース作りをする。 ・後に来た友達の様子を見て発言する。 ・Tが教室にいないことに気づき、あれ?という表情を示す ・時間を伝えたと並び始める。	・新しい班での配膳。開始が遅れるが、配膳が始まるとスムーズに配っていき、当番ではない児童も、Tの声かけによって手伝う。 ・おかわりをする。(男女ともに) ・食べ終わる時間を把握している。ごちそうさま後の歯磨きタイムでも、食べ終わっていない児童は食べてよいということを理解して食事を進めている。	・ろうかそうじ 先頭を決める。 ・ 先頭になった児童がリーダーとなって指示を出す。 ・互いに声を掛け合いながら進める。
11月⑰				
11月⑱	◆板書なし	・登校した児童から用意をする。 ・用意のあと、水やりをおこなう。 ・Tに「(体育着に)おきかえしますか?」と聞く。 ・友だちの髪に気づいて話しかける。(髪の水を切ったね)	・配膳がスムーズに行われる。12時45分前に食べ始める。 ・給食当番の児童 ・片づけの遅い児童の手伝いをする。 ・片づけの準備に遅かった給食当番の児童を呼ぶ。 ・「歯ブラシ(出していない人)もいませんか?」と他の児童に呼びかける。	・ろうかそうじ 掃除の先頭を決定し、先頭が後ろに続く児童をリードする。「ぬかさないで、早く行ってよ。」「こよしくね」と会話をしながら、掃除を進めていく。
12月⑳	◆板書なし	・それぞれに用意をする。 ・用意の余裕が出てきたためか、周りの児童との会話が夢中になり、用意がなかなか終わらない児童がいる。 ・チューリップの観察をする。	・役割を理解し、それぞれに行動する。 ・周りの児童が声をかけ、遅い児童の行動を促す。 ・会話が夢中になり、時間以内に食べ終わらない児童がいる。 ・片づけの遅い児童の手伝いを遅い児童を中心に行う。	

聴力検査の際には、男子は待ち切れず、隣の児童と遊び始めたり、列を外れて待とうとする児童が見られた。長時間待つという経験がまだ少なく、静かに座って待つという行為に慣れていなかった。

授業の開始とともに、授業前後の挨拶がはじまり、児童は「よろしくおねがいます」「ありがとうございます」などを練習した。「背筋を伸ばして良い姿勢で座ること」、「決まった位置に教科書や筆箱を置くこと」「鉛筆の正しい持ち方」を教師は徹底して指導し、45分間机に向かえるように児童の学習環境を整えていた。6月以降は教師が指示を出さなくても児童が進んで授業の準備をする姿が見られた。その際、教科書や筆箱はおおよそ定位置に置かれており、児童が決まりにしたがって行動していることがわかった。

授業中の発言についても、5月から6月にかけて挙手をする児童の数が増えていった。始めは挙手を控えていた児童も、少しずつ発言ができるようになっていった。児童の前に立っての発表方法になると、普段発言をする児童も少し緊張していた様子が見られたが、普段とは異なった発表方法を楽しんでいるようにも見えた。時には、児童間で競いながら学習する授業もあり、児童は授業の経験を重ねるごとに、学習に取り組む姿勢を獲得していったのだと推察される。

(3) 給食の時間における行動の変化

①準備

4時間目の授業が終わると、給食の時間を迎える。児童が給食を早く食べ始めるためには、できるだけ短い時間で早く着替えを済ませ、配膳を始めることが必要である。給食時、すべての児童が給食着とマスクを着用し、食事中も給食着は着用したまま食事をする。そのためまだ給食が開始していない4月中旬には、給食の準備の練習を行い、教師が着替えの着脱や給食時の班編成などを指導した。一週間後、実際に給食の時間を迎えると、着替えに苦戦する児童が多く、特に女子は髪の毛を帽子の中に入れるのを観察者に手伝ってもらった場面が見られた。また着替えに集中するあまり、トイレや手洗いを忘れていたり、出歩いたままなかなか着席をしない児童がいた。その結果給食開始当初は準備をするまでに時間がかかっていた。

給食が開始1週間で、学級の児童は一斉に準備にとりかかり始めていた。当初は着替えに手こずっていた児童も、自分でできるようになり、自分なりに早く着替える工夫をする児童もいた。トイレや手洗い、着替えをすばやく終え、早くに着席して待つ児童の様子も見られた。児童の多くが、着替えやトイレ、手洗いは各自で行うことができるため、給食の準備を比較的短い期間で身に付けられることがわかった。

②配膳

教室の右手側に、給食当番表が掲示されている。児童はそれを見て自分の担当や給食を配るペアを確認する。給食開始当初は、給食当番の児童が自分の担当を把握しておらず、給食当番以外の児童もなかなか着席しない様子が見られた。給食当番と給食当番以外の児童の行動はまだ定まらず、配膳を開始するまでに時間がかかった。また給食当番の児童は、一学級分の主菜や副菜、汁物を、ほぼ同じ量で盛り付けることに苦戦しており、しゃもじやおたま、トンゴなど、日ごろ使用しない調理器具を使うこと自体にも困難を示す児童がいた。そのため教師が盛りつけの目安や配り方を指導し、1つ1つ声をかけ、児童は配膳の仕方を学んでいった。給食の準備をするときに比べ、スムーズに配膳するためには時間がかかったが、給食当番は2週間交代のため、約1カ月

間で、教師がほとんど手伝わなくても児童だけで配膳することができるようになった。

また当番の班が新しくなり、自分の担当が変わると、再び配膳に苦戦する様子が見られた。しかし1週間経過すると、児童はスムーズに配膳を進めていた。当番の班を新しく編成し、当番が交代になると、1時期は配膳がスムーズに行われないことがあるが、1度定着した配膳方法で配膳をしているため、配膳は2、3日で上手にできるようになった。さらに、配膳に慣れてくると、給食当番の児童同士で会話もみられ、声を掛け合って配膳を進める様子もあった。2学期には教師が不在の日があったが、児童はいつもと同じように配膳を進めることができた。観察者がほとんど手伝わなくても児童だけで配膳をすすめ、配膳が終わる時間も通常とほぼ変わらなかった。給食の開始当初から、ルールに従い配膳方法を身につけたことで、児童はそれを基本として行動できるようになったと推察される。

③ 食事

給食を十分に食べられるよう、教師は「給食を全部食べ終わったら、会話をしてよい」という決まりを給食開始当初から継続的に児童に伝えていた。食事の時間は平均で25分程度設けられているが、児童の多くは食べ終わるまでに時間がかかり、4月中はほとんど会話のない、静かな給食の時間が続いた。5月には、給食を食べきる児童が増え、それとともに班の児童と食事をしながら会話を楽しむ様子が多く観察された。会話の内容も給食のメニューへの感想だけでなく、習い事や学級の友達の話、学習についてなど豊富である。2学期は、休んだ児童についての会話も観察された。小学校の給食や決められた時間の中での食事に慣れるに従い、次第に班の児童とも打ち解けていくことがわかった。

また給食を全て食べた児童やおかわりをした児童は、帰りの会の「一日の中でよかったこと・がんばったこと」という場面で挙手をして児童の前で報告をすることがある。教師も給食中に児童の席を回り、全部食べきれた児童やおかわりをした児童の名前を挙げて褒めていた。給食を食べきることやおかわりをすることは、教師に褒められ、かつ自分で達成感を得ることのできるため、児童にとって大きな目標の1つになっていった。一方で、会話に夢中になって食事が進まない児童も少なくない。教師は配膳が終わると食事時間の目標を伝え、「会話の前に、まずもりもり食べよう」と指導する。教師のこうした声かけによって、児童が会話を止め再び食事に向かう場面が何度も見られた。また好き嫌いのある児童は嫌いな食べ物を先に食べ、時間内に全てを食べることが難しいと自分で判断した児童は、給食を食事前に減らしていた。このように給食を楽しみつつも、配膳された給食を食べきれるように工夫をする児童の姿も見られた。

④ 片付け

給食開始当初からを片づけの中で児童が最も苦戦していたのは、「牛乳パックの蓋を開けること」であった。対象校では、飲み終わった牛乳パックの蓋を開け、一枚に開いて回収する。幼稚園でも牛乳パックを開けていた経験がある児童もいたが、児童の多くは牛乳パックの上部を押し込み、つまんで開ける作業には試行錯誤している様子だった。また一度上手く開けられても、翌週には再び苦戦する児童の様子もみられ、牛乳パックを開けることは片づけの上で大きな壁であったことが推察される。しかし教師は児童自身に取り組みせ、1人で開けられるよう指導をしていた。そのため、苦戦していた児童が牛乳パックを開けられたとき、その児童はとても嬉しそうな表情を見せた。牛乳パックを自分で開けられるようになった児童は、全体の片付けも早くなった。

また給食に慣れてくると、時間内に給食を食べる児童も増え、片付けを早く行うことができるようになった。給食当番を中心に片付けの遅れている児童を手伝う場面も見られ、学級全体としても早く片付けをしようと行動する様子が見られた。これは教師が片づけを手伝う児童を褒めることで、周りの児童も自発的に手伝いをしようとしていることに加え、5月から掃除が始まったことで、次への行動の見通しが持てたためではないかと推察される。

(4) 掃除への取り組み

5月から始まった掃除では、6年生に手伝ってもらい教師の指導でほうきの掃き方と雑巾の拭き方を身に付けた。児童は一列になり、床の升目に沿って一列ずつ掃除を進めていく。ほうきの掃き方では、両手で持ってごみを集める方向へほうきを掃いていくが、中には方向転換をしても掃き方を変えずに掃き続け、集めたごみを散らしてしまう児童がいた。ごみを集めるという意識よりも、機械的にほうきを動かしていた様子であった。また雑巾がけでは、膝をつかず、お尻を上げて四つん這いの状態で拭くことを目標に教師が指導していた。男子児童の多くは、勢いよく雑巾がけをすることができたが、女子児童には、膝とお尻を上げた状態で雑巾がけをすることができず、何度も転んでいる児童が見られた。

6月になると掃除に慣れたのか、互いに注意をあいながら掃除をする様子が見られた。ほうきでごみを掃いた後、すぐに雑巾を洗いに行くなど、掃除の流れを把握して行動していた。その一方で、ほうきの掃き方が雑になり、児童が掃除場所を勝手に判断して途中で掃除を終わらせてしまうなど、本来の掃除をしようとしない場面もあった。この背景には、掃除への慣れが影響したと推察される。また廊下掃除が早く終わった児童が、教室掃除の手伝いをしている姿を教師が褒めたことがあったが、それを見た児童は、決められたルールに沿って掃除をするよりも、早くに掃除をして他の教室場所を手伝うのが良いのだと、誤認識したようである。

2学期以降は、掃く・拭くが定着した。丁寧に掃除しながらも、掃除全体のスピードは上がっていた。また掃除する順番を決めてから掃除に取り掛かる様子が見られ、先頭になった児童はリーダーのような存在となり、他の児童に呼びかけながら取り組んでいた。

(5) 日直・係活動への取り組み

日直は5月から始まった。学習時のあいさつに加え、児童の前に立って朝の会や帰りの会の進行を務める。1日交代で日直になった児童はこれらを行うため、児童にとって普段の係活動とは違った特別な役割であると考えられる。日直が始まった当初は、日直になった児童は、みんなの前に立って話すことに慣れていないためか、声が小さく緊張した様子がかがえた。学習時のあいさつは児童の席で行うが、やはり声は小さく、学級全体に十分に届いていなかった。教師が言葉を教え、それに続くようにして日直の仕事をする児童もおり、あいさつや進行の言葉を覚えるまでは、このような児童の姿が見られた。

しかし日直の児童は交代しても、発言する内容は同じなので、1週間ほどで内容を覚え、スムーズに朝の会を進める児童もいた。日直の仕事を理解するのは、比較的女子児童の方が早く、女子児童がリードして男子児童とともに日直の仕事を行う様子が多く見られた。また観察者に「○○(児童の名前)、次の次に日直なんだー！」と報告する児童もおり、日直が回ってくるのを楽しみにしている児童もいた。1学期後半以降は、男女ともに声を揃え、集団の前でも落ち着いて日直の仕事を行えるようになった。中には全体の児童が静かになってから授業のあいさつを始める児童も

おり、周りにも目を向ける余裕が出てきていた。

また日直ではない児童も、日直が話しているときには静かに日直の話を聞くことができ、日直があいさつを忘れているときには声をかけて指摘する様子が見られる。日直の活動が始まる際に、教師が「日直は、先生と同じ」であることを伝えており、普段の教師の話を聞くときと同じように、日直の話を聞くことができていた。また朝の会ではおんがくがかりがCDをかけ、帰りの会では児童が頑張ったことを発言する機会がある。日直以外も活動し、発言する場面があることで、朝の会に取り組む意識が高まるのではないかと推察される。係活動は、係活動が始まった当初から意識の高い児童が多く、積極的に活動しようとしていた。しかし『自分がやりたい』という思いが強く、係によっては、児童同士がぶつかり合うことがしばしば見られ、教師や観察者に報告に来る児童がいた。しかし係活動の定着とともに衝突は解消され、次第にみんなで分担して活動しようとするようになっていった。同じ係の児童に声をかけて協力して取り組む様子や、活動を楽しそうに行っている様子もしばしば見られるようになった。

一方、児童の中には係活動への意識が低い児童もおり、教師や児童に指摘されてやっと係活動があることに気づく児童がいた。しかし対象学級の児童は、比較的みんなで活動しようとする傾向が高い。学校生活の中での児童間の関わりが深まってきたことも影響していると考えが、教師が言わなくても、係の児童が同じ係の子に声をかけて一緒に活動しようする場面が見られた。このような児童から児童への働きかけにより、係活動への意識が低い児童も、少しずつ改善に向かっていくと推察される。

2学期になると、係も新しくなった。そのためか、仕事を忘れてしまい、新しい係活動が定着していない児童の様子も見られた。しかし1学期で各係の様子を見ていたためか、多くの係活動は早くに定着し行動できていた。集団生活における係活動は、自分だけが活動できればよいという当初の様子から、次第に周りへの意識が高まり、協力しながら活動するようになっていった。

3-3 1年生が学校生活のルールを身につけていく過程

1年生は入学後、学校生活特有のルールの存在に戸惑うがそれに沿って行動することを知り、学校生活での基本的な行動を身につけていくことが明らかになった。各活動でのルールが身につくと、1年生は自主的に行動できるようになり、次第に友だちへの意識が高まっていく。班活動や係活動では、色々な友だちとの関わりの中で、協力し手伝おうとする場面が多く見られ、徐々に集団生活に慣れていった。登校後の用意は入学直後から、給食は4月下旬、掃除や日直・係活動は5月からのため、同時期に同じような状態であるわけではない。しかし活動別にエピソードを整理すると、どの活動においても概ねこのような過程を経て適応していった。「適応」とは新しい環境に慣れ、ルールを理解して、小学校で生活できるようになることだけでなく、望ましい人間関係

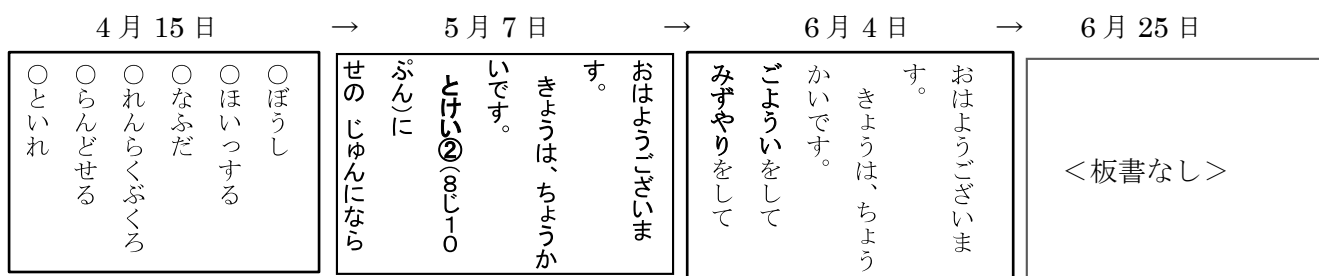


図1 登校時の板書の変化

を通して、小学校が自分たちの新しい生活の場であると、児童自らが実感を伴って自覚した状態である（渡辺・伊野、2013）という。

図1は、登校時の板書を示したものである。入学当初は、黒板に用意の手順を書き1年生が見通しを持って行動できるよう配慮していた。1年生が一人で用意できるようにするため、入学当初は1年生の様子を見て、必要であれば個別に声をかけて次の用意を促した。児童の行動が身についてくると、次第に個人への声かけは減少し、見守ることが多くなった。次第に指示は個別から学級全体へと変わっていった。また次の活動への切り替えとして、板書に目標時間を書き、朝会など朝の活動内容全体が見通せるように示していた。口頭でも1年生に目標時間を伝え、学級全体として時間以内に全ての用意ができるように、そして見通しを持って児童が行動できるように指導していた。

同様に4月の入学直後から、教師は1年生に話を聞く姿勢や登校後の用意の順序、鉛筆の持ち方や机の上の教科書の置き方等を細やかに指導していた。給食の準備や片づけの方法、掃除の仕方なども明確に示し、1年生が各活動のルールの基本形を身につけられるようにしていた。また児童の適切な行動が見られた場合には、その都度名前を挙げて児童を褒めていた。何に対して評価しているのかを具体的に伝えることで、褒められた児童だけでなく、他の児童にも伝わるようにし、学級全体の行動を促していた。一方行動が遅れがちな児童には、次の行動を促す声かけをし、学習面での配慮が必要な児童に対しては、休み時間や給食の準備中に個別に課題を行うなど、必要に応じて1対1での指導を行っていた。

1年生が学校生活に適応していく過程から、多様な戸惑いや失敗があるものの、1つ1つ子どもたちは学校生活特有のルールを身につけ、それを解消するようになった。その際、教師の指示の示し方には細やかな工夫がなされ、1年生は学校生活における自分の行動が身につくことで友だちの行為に意識が高まり、仲間への声掛けをするようになるなど仲間関係を活発にしていくことにつながっていくことも示された。そのため1年生が小学校での生活を知り、各活動での行動の基本を身につけることが個人の適応にとってもクラスの安定のためにもとても重要である。入学直後から生活面も含め丁寧に指導していくことで、一人ひとりが学校で安心して生活できることにつながっていくことが推察された。

3-4 今後の課題

本研究は、入学直後から学級に入ること、1年生が具体的にどのように学校生活に慣れていくのか、そのプロセスを明らかにすることができた。今後は授業の場面にも広げて1年生の適応過程を示していきたい。

引用・参考文献

塩澤雄一 幼稚園・保育園と小学校のスムーズな接続への一考察、目白大学人文学研究 7、p.215-224、2011。

西山薫 幼保小の連携の方向性と今日的課題、清泉女子学院短期大学研究紀要第2号、p.106、2002。

丹羽さかの・酒井朗・藤江康彦 幼稚園、保育所、小学校教諭と保護者の意識調査—よりよい幼保小連携に向けて—、お茶の水大学子ども発達教育センター紀要、p.39-50、2004。

濱田祥子 幼小交流活動は幼児にとってどのような体験であるか—交流前後のインタビューから—、幼年教育研究年報第32、p.11-19、2010。

椋田善之 幼児教育と小学校教育の接続および連携に関する研究動向 日本保育学会における発表論文

- (1985～2007)を中心に、摂南大学教育学研究 5、p.57-63、2009。
- 山本多喜二・利島保・石井真治・藤原武弘・福田廣・浅川潔司・古川雅文・南博文 幼児の生活環境拡大の微視発生に関する比較文化的研究 昭和53～55年度科学研究費補助金一般研究 (B) 課題番号15401研究成果報告書、1981。
- 上野彩 現代における幼稚園から小学校への移行の実態～幼・小連携への考察にむけて～、埼玉大学教育学部家政専修卒業研究、2005。
- 吉川はる奈、上野彩、船山徳子 小学校1年生の学校適応過程に関する研究、埼玉大学紀要教育学部55(2)、41-50
- 盛真由美・尾崎康子 幼稚園から小学校への移行における適応過程に関する縦断的研究」、富山大学人間発達科学部紀要2 (2)、175-182、2008。
- 山本博樹、荷方邦夫、小野瀬雅人、犬塚美輪、山本博樹、水野治久、高垣マユミ
児童のつまづきを大切にする教科書学習の支援：支援の本質的な困難性とは何か？ (自主企画)、日本教育心理学会総会発表論文集 (53)、p.650-651、2011。
- 渡辺良勝・伊野真司 入学期における児童の小学校生活への適応に関する研究 (中間報告)、神奈川県立総合教育センター研究集32、p.41～50、2013。

(2014年3月31日提出)

(2014年4月18日受理)

The process when a first grader adapt to school life in elementary school

FURUYA, Kaho

Faculty of Education, Saitama University

YOSHIKAWA, Haruna

Faculty of Education, Saitama University

FUNAYAMA, Noriko

OMIYA Elementary School

IMAMURA, Shinya

OMIYA Elementary School

Abstract

While practicing repeatedly, the first grader having got to know the rule peculiar to school life, and being puzzled as a result of the participant observation in a first grader class, it becomes a model of the child who does not get the child who can do it, and came to practice independently. It became clear that it is adapted in the sprout of the consciousness to a friend and the process in which it helps and cooperates, gradually. Moreover, although the “failure” was shown in the new environment of an elementary school, the time was seen immediately after entrance into a school by the fundamental lifestyle which was being mastered before many of first graders, such as seeing not only in the 1st term but in the 2nd term’s and the 3rd term’s, excretion, and spare clothing’s, entering a school. To a child’s puzzlement, the class teacher stepped on the stage and has spoken so that it can act with a prospect, and it was suggested that these could be regarded as a device in which a first grader does sense of security and which he can pass at an elementary school.

Key words: a first grader, an elementary school, an adaptation process, school life